
フィデリオ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フィデリオ

【Nコード】
N3592F

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
監獄に新たにやって来た若い看守フィデリオ。彼はそこで何かを探していた。その折悪名高い高官ピツアロも監獄に来ていた。その目的は。ベートーベン唯一のオペラを小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 監獄へ

高い塀に囲まれた刑務所であつた。門は固く閉じられ中は一切見えないうようになっていた。それだけでこの刑務所が唯ならぬ存在であることがわかる。その奥深くの仕事部屋で声が聞こえていたがそれは誰にも聞こえはしなかつた。

「おい」

若い茶色の髪 of 青年がその部屋に入ってきた。緑の目をして顔にはソバカスがある。背は高く筋肉質であつた。それを見ると彼が肉体労働に携わっているのがわかる。

「そろそろ休まないかい、マルツエリーナ」

「ヤキーノ」

それを受けて部屋でアイロンをかけている少女が顔を上げた。見れば小柄で少しくすんだ蜂蜜色の髪をした可愛らしい少女だ。茶色の大きな瞳を持っている。

「お昼だしさ」

「もう少し待つて」

しかし彼女はまだ休もうとはしなかつた。

「これが最後だから」

「そんなの後ですればいいのに」

ヤキーノはそう言つて渋い顔をした。

「休み時間は決まってるんだから」

「それはそうだけれどね」

しかし彼女はそれでも手を休めなかつた。

「お仕事は最後まできつちりやらないと」

「ちえっ、真面目なんだ、マルツエリーナは」

「それが仕事だからね」

いささか不真面目な様子のヤキーノの対して彼女は本当に勤勉で

あつた。最後の一枚を今終えた。ヤキーノはそれを見届けてからまた声をかけてきた。

「ねえ」

「お昼御飯なら外で食べましょう」

「いや、それもあるけれど」

彼はもじもじしだした。

「どうしたのかしら」

「あのね、マルツエリーナ」

「ええ」

「ちよつとだけ聞いて欲しいんだ」

顔を赤くして言う。

「何かしら」

「僕と君はもう長い付き合いだよね」

「そうね。何年経つかしら」

「それでね、言いたいんだ」

「何を？」

「僕とね、結婚してくれないかな」

「それ前にも聞いたわね」

マルツエリーナはそう言つて微笑んだ。

「これで何度目かしら」

「何度でも言うよ」

ヤキーノも退くつもりはなかった。

「僕と結婚してくれ、お願いだから」

「貴方と」

「そうなんだ。いいだろう？」

「それは」

だが彼女は言葉を濁した。

「駄目なのかい？」

「いえ」

それには首を横に振る。

「そうじゃないけれど」

「じゃあどうしてなんだい、僕じゃ駄目なのかい？」

「貴方のことは嫌いじゃないわ。これは本当に」

彼女はそれは認めた。

「けれど今は」

「またそんなことを言っで。これで何度目なんだ」

「何度目だっでいいでしょう」

マルツエリーナの口調がきついものになった。

「貴方には関係ないもの」

「そんなことを言うのか」

「ええ」

彼女は答えた。

「とにかく今はそんな気分じゃないの。わかった！？」

「クッ」

「おおい」

そこで外から年配の男の声がした。

「！？」

「ヤキーノ、いるかい？」

「？何だろう」

「行った方がいいわよ、ヤキーノ」

「ちえっ」

マルツエリーナは逃れられたと見た。ヤキーノはそれを残念に思った。彼は仕方なくその場を後にした。

こうしてマルツエリーナは一人になった。そしてほっと安堵の息をついた。

「とりあえずは行っただわね」

だがすぐに戻ってきた。マルツエリーナはそれを見て心の中で溜息をついた。だがあえてそれを隠して彼に尋ねた。

「で、何だったの？」

「ちよっと午後の仕事のことだね」

彼は答えた。

「ちよつとした打ち合わせだ。けれどすぐに終わったよ」
「そうだったの」

彼女はそれに頷いた。

「それでまた聞きたいんだけど」

「また!？」

今度は露骨に嫌な顔をした。

「そうさ、さつきも言っただろう? 僕は何度も確かめるって」

「あのね、ヤキーノ」

彼女はたまりかねて言った。

「今は言えないわ、すぐに」

「それも何回も聞いたよ」

「それでもよ」

彼女は言い返した。

「これもさつき言っただわね」

「じゃあ答えは変わらないんだね」

「ええ」

彼女は答えた。

「とにかく今すぐは駄目よ」

「そうか、わかったよ」

彼はそれを聞いて止むを得なく頷いた。

「じゃあ今はいいよ。それじゃあね」

そう言つて昼食を手にとって部屋を出ようとする。

「けれど僕は諦めないからね」

マルツエリーナはそれに答えなかった。彼女はそれを聞き流していた。

ヤキーノはその場を後にした。そしてマルツエリーナは今度こそ一人になった。

「やっとな」

ふう、と一息ついた。

「何を言っても駄目なのに。馬鹿な人」

彼女の心は彼にはないようであった。では誰のところにあるのか。
「前までだったら受けられたのに」

だが今は駄目なようだ。それは何故か。

「フィデリオがいるから。あの人には心を動かされなくなってしまったわ」

フィデリオとはこの前新しく来た看守である。ヤキーノの同僚にあたる。銀色の髪に青い目をした凛々しい若者である。背は高くスラリとしている。いつも物憂げな顔をしている。彼女は彼に心を奪われてしまったのだ。

第一幕その二

「あの人が私の夫となるのだったら」

彼女は呟いた。

「甘い喜びを以って希望が心を満たすのに。朝から夜まで」

もう彼と結ばれた時のことに想いを馳せていた。まるで夢見る少女のように。いや、その時の彼女の心はまさに少女のそれであった。

「休む時も。一切の苦しみもあの人の側だと癒されるでしょうに」

しかしそれはまだ夢の中だけであった。そして永遠に夢の中のものとなるのではないかと内心心配していた。だがここで別の声がした。

「おうい」

「お父さん」

彼女の父である看守長ロッコが部屋に入って来た。白髪頭の壮年の男である。髪は白いが髭は黒かった。白い頭と黒い顔で実にコントラストであった。厚い看守の服を着ていた。

「フィデリオは帰って来たか？」

「いいえ」

彼女は首を横に振った。

「まだよ」

「そうか」

彼はそれを聞いて頷いた。

「用事があるのだから」

「何かあるの？」

「うむ。わしは総督様にフィデリオを寄越すよう手紙を書かなければならんだ。それで探しているのだが」

「そうだったの」

「もうそろそろこっちに来る頃だと思ったのだがな。昼飯を受け取りに」

「じゃあここで待ったらどうかしら」

「そうだな。それがいいか」

そう言いながら昼食を手にとった。するとそこで扉が開いた。

「おっ」

「帰って来たわね」

マルツエリーナの声がはしゃいだ。開かれた扉から一人の青年が入って来た。

「どうも」

高いが鋭い、それでいてツヤのある声でその若者は応えた。何処か女のそれに似た声であった。見れば美しい顔をしていた。

「ああ、フィデリオ」

ロツコは早速彼に声をかけてきた。

「何でしょうか」

「鎖の方はもういいのか」

「はい、大丈夫です」

彼は凜とした声で答えた。

「どんな囚人でも断ち切ることのできない鎖ばかりですよ」

「そうか、それならいい」

ロツコはそれを聞いて顔をほぐれさせた。

「御前は本当によくやってきているよ。御前みたいな若者がいてくれて本当に助かる」

「有り難うございます」

「何時かこれに報いなくてはな」

「報いとは」

マルツエリーナはそれを聞いて顔を明るくさせた。

「まさか」

「まあそれはいずれな。ところでだ」

「はい」

「総督様がこのセヴィーリアから御発ちになられるのは知っているな」

「勿論です」

「なら話は早い。わしは総督様に御前のことについて手紙を書かねばなんのだ」

「どうしてでしょうか」

「決まっている。御前の立派さについてだ」

「いや、それは」

ここで彼は謙遜した。

「私なぞはとても」

「いやいや、御前程立派な若者はそうはおらん。ここは是非申し上げておかねばなんからな」

「申し上げたらどうなるの？」

「まず御金が貰える」

ロツコは誇らしげにそう述べた。

「世の中まずお金がないとな」

「それはそうだけれど」

「お金があればどんな苦しみも乗り越えられるだろう？ 懷にあの音がするだけでな」

「それはそうですけれどね」

「あらヤキーノ」

ヤキーノがここで帰って来た。

「食べ終わっただんで戻ってきました」

「そうなの」

「おう、御前も聞け」

ロツコは彼に対しても声をかけた。

「御前も御金は好きだろう」

「そらやまあ」

「お金があれば力も湧いてくるし幸福も訪れるんだ。何もかもお金がなくて話にもならない」

「それでフィデリオさんのことを総督様にお願いするのね」

「そうだ。働きに見合ったお給料を渡してもらおうよにな」

「有り難うございます」

フィデリオはそれに対して恭しく頭を垂れた。

「ですが私は看守長にも申し上げたいことがあります」

「何だい、それは」

「御金よりもさらに重要なものがあるのです」

「？何だ、それは」

ロッコはそれを聞いて首を傾げた。フィデリオはそんな彼に対して言った。

「信頼です」

「信頼」

「はい。何故私が御供をするのを認めて下さらないのですか」

「わしの仕事の補佐か」

「そうです。信頼して下さるのなら是非」

「気持ちには有り難いが」

「では何故」

どういうわけかロッコはここで言葉を濁したのであった。他の者にはそれが極めて不自然であった。

「お父さん、どうしてなの？」

マルツエリーナが父に問うた。

「フィデリオさんを御供にすればいいのに」

「そうだな」

彼は娘に対して応えた。

「そうすればわしの負担も減る。わしも歳だ」

「ええ」

黒いのはもう髭だけであった。それからもわかる。

「総督様もそれを認めて下さるだろう」

「では何故」

「一つ問題があるのは」

「それは何？」

「うむ、これは内緒だな」

彼はここで三人を見回した。

「あまり大きな声で話すことじゃない。こっちへ来てくれ」

「ええ」

「わかりました」

彼等はそれを受けてロツコの側に集まった。ロツコはそれを見届けてから話をはじめた。

「この牢獄の奥にな、一人の囚人がいるのだ」

「奥に」

「そうだ。その囚人はどうもかなりの重罪人のようなのだ」

「何をしたのかしら」

「そこまではわからんが。そこに入ってもう二年になる」

「二年」

「そうだ」

声をあげたフィデリオに答えた。

「二年だ。かなり長いな」

「ええ」

（まさか）

フィデリオはそれを聞いて何やら思うところがあるようだ。しかし顔にも口にも出さない。

「それでその人は何処の人なの？」

「それはわからない」

娘に対してそう答える。

「何て名前ですか？」

「それもわからないのだ。一切不明だ」

ヤキーノにもそう答える。看守長であるロツコですら知らないということに三人は何やら重大なものを感じ取っていた。

「わかるだろう、それだけ言えば」

「はい」

三人はそれに頷いた。

「フィデリオよ。それでもいいか。知れば何やら厄介なことになる

ぞ」

「構いませんよ」

しかし彼はそれでも言った。

「看守になった時からその覚悟はできていますから」
「そうか」

ロッコはそれを聞いて頷いた。

第一幕その三

「御前さんは勇気もあるようだな。さらに気に入った」

「目的を達成する為なら」

彼は言った。

「勇気は欠かせないものですから」

「うむ」

「フィデリオさん」

マルツェリーナが声をかけてきた。

「頑張つて下さいね」

「はい」

「そしてその囚人の方にも神の御手を」

「わかつています」

「それだけの思いやりの心があれば大丈夫だな」

ロッコはそこまで聞いて決心した。

「では総督様にそれをお願いするとするか。御前さんをわしの補佐役にすることもな」

「ええ、お願いします」

「お父さん、絶対よ」

「わかつておる」

娘に対してまた答えた。

「ではな」

「はい」

ロッコは部屋を後にした。フィデリオがそれに続く。ヤキーノはここにいっても今は無駄だと悟ったのか仕事に戻った。マルツェリーナはそれを見届けた後でアイロンがけに戻った。彼等はそれぞれの仕事に戻ったのであった。

この刑務所の門は壁のそれと同じく高く、そして厚い。しかも鋼でできていた。悪魔の装飾が施された漆黒の門であり、それが開か

れることはないようにすら思われた。まるで地獄の門であつた。

しかし今その地獄の門が開かれた。入口から一人の男が取り巻き達を引き連れ中に入つて来た。

黒い服とマントを身に着けている。厳しい顔をした大きな身体の男でありその目の光は黒く鋭い。まるで魔物のようであつた。髪は黒く後ろに撫で付けられている。黒々と不気味に光っている。

その周りにいる男達もまた不気味な者達であつた。彼と同じく不気味な黒い服を着ていた。だがマントは羽織つてはいない。また黒い服といつても彼等のそれは軍服の様な制服であつた。男の豪華な貴族のそれと比べると明らかに差があつた。まるで魔王とその従者達のものであつた。

男の名はドン・ピツァロという。この刑務所の所長である。かつてはスペイン警察の重役であつた。そこで酷吏として知られていた。罪なき者達を陥れ、苛烈な拷問により無理矢理自供させ、その財を巻き上げるのを得意としていた。だがそれとある貴族に追求され、刑務所の所長に左遷されていたのである。狡猾にして残忍、貪欲な男として知られている。

「少ないな」

彼は壁を見上げてそう言った。

「歩哨の数はもっと多くしろ」

「ハッ」

その声に後ろにいる黒服の男達は頷いた。

「橋にもだ。この程度では警護とは言わぬぞ」

「わかりました」

彼等はそれに頷いた。そして左右に散り周りの者にピツァロの言葉を伝えたのであつた。ピツァロはそれを不機嫌そうな顔で眺めていた。

「この程度のことわからぬとはな。無能共が」

そう言いながら橋を渡り刑務所の中に入った。取り巻き達も入ると門が閉じられた。その時重い音が刑務所の中に鳴り響いた。

「お帰りなさいませ」

ロッコが彼を出迎えた。後ろにはフィデリオもいる。

「うむ」

ピツアロはそれに対し傲慢に返した。

「御苦労であつた。ところで手紙か何かは届いているか」

「はい」

ロッコはそれに頷いた。そして手に持っているものを差し出した。

「こちらに」

「ふむ」

ピツアロはそれを受け取った。そしてその表をまず見た。

「まずは紹介状か。そして詰問状」

「はい」

「見たことのある筆跡だな」

そう言いながら封を切る。そしてその中身を見た。

「これは大臣のものか」

「大臣の！？」

フィデリオはそれを聞いて呟いた。

「！？ロッコよ、そちらにいる者は」

ピツアロも彼に気付いたそしてロッコに尋ねてきた。

「最近新しく入った看守の一人ですが」

「そうか」

「フィデリオと申します。お見知りおきを」

「うむ」

鷹揚に答え手紙に戻った。見ればこの刑務所の囚人の扱いについての詰問状であつた。囚人の虐待の噂を聞き、大臣自ら視察に来るというものであつた。

「まずいな」

彼はそれを見て呟いた。そして心の中で思った。

（大臣は今までフロレスタンが死んだものと思っていた。しかしこの刑務所に彼がいると知れば。厄介なことになるな）

彼はこの時自分の首が寒くなったのを感じていた。大臣とフロレスタンという男の関係について知っているうえでそう思ったのであった。

（ここは一思いに）

そしてこう思った。

（やってしまふか。思い立ったが吉日だ）
急に決意を固めた。

（戸惑っているのは駄目だな、毒を食らわば皿までだ。よく考えてみると今まで生かしておくこともなかった）

誰かを殺そうと決意したらしい。

（誰かに任せては駄目だな。私でやろう。私自身で方をつける）
「所長」

黒服の部下達が彼に声をかけてきた。

「どうした？」

「そろそろ中に入られませんか」

「中に？」

「はい。ここでも仕方がないでしょうし」

「そうだな」

ここでようやく我に返った。そして辺りを見回した。

第一幕その四

「ここにも寒いだけだ。では中に入ろう」

「それが宜しいかと」

「だが楽しみだな」

「？何がでしょうか」

「いや、焦るだけ無駄だと気付いたのだな」

「焦るだけ？」

部下達はそれを聞いて首を傾げさせた。

「どういう意味でしょうか」

「何を考えているのだ？」

それはフィデリオも同じであつた。ピツアロの話を聞きながらその心を探っていた。

「自分で決着をつければいいと気付いたのだからな」

「ご自身で」

「いや、それはいい」

彼は部下達にそう言つて誤魔化した。

「御前達には関係のないことだ」

「左様ですか」

「そう、彼等には関係ない」

フィデリオはそれを聞いて呟いた。

「だが私には関係があることも知れない」

「ロツコ」

ピツアロはロツコに声をかけてきた。

「はい」

「ラッパ手を見張り台に登らせておくようにな」

「わかりました」

「大臣の馬車が見えたら、すぐにラッパで合図するようにな伝えておけ。よいな」

「はい」

ロツコはその指示に頷いた。

「頼むぞ。これはボーナスだ」

そう言つて懷から袋を取り出した。

「遠慮なく受け取るがいい」

「これは」

手に取ると何やらジャラジャラとした音が聞こえてきた。それから彼はこの中にあるものが金だとわかった。

「とつておけ」

「ラッパ手を手配するだけでこれだけでも」

「無論それだけではない」

ピツア口はそう断つた。

「これからまた一つ仕事をしてもらつ」

「どのような仕事ですか？」

「処刑だ」

彼は冷たい声でそう言い放つた。

「処刑！？」

「そうだ、この偉大なるスペイン王国に反逆した愚か者を処刑するのだ」

「まさか」

「本当だ。だからこそそれだけの金をやるのだ」
言外に圧力をかけてきた。

（さもないとわしが破滅するからな）

「よいな」

「あの男ですよね」

「そうだ、わかつているではないか」

ピツア口はそれを聞いて顔をほころばせた。

「ならば話は早い。わかつたな」

「しかしあの男はもう殆ど死んでいますし」

「止めをさすのだ」

ロツコはそれをしなくてもいいようにと言い逃れをする。だがピツアロはそれを許しはしなかった。逃げ道を塞ぎにかかってきたのであった。

「よいな」

「私はそのようなことをしたことはないですが」

「何!？」

ピツアロはそれを聞いて顔を前に出してきた。

「今何と言った」

「私は人を殺したことはないです」

「馬鹿な。そなたは看守長だろう。長い間ここにいてもか」

「死刑執行人にはなったことがあります」

弱々しい声でそう答えた。

「そうなのか」

「墓掘りならありますが」

「ではそれでいい」

「はあ」

「実際には私が手を下そう。よいな」

「わかりました」

「うむ」

これで決まりであった。ピツアロは納得したように頷いた。

「では行くとしおう。スコップは出しておけよ」

「はい」

ロツコは頷いてからまたピツアロに尋ねた。

「あの」

「何だ？」

「本当にやるのですね？所長」

「勿論だ」

「長い間苦しんできた罪人を」

「二年もな」

「二年」

フィデリオはピツアロのその二年という言葉聞いて眉を動かした。そこに何かがあるのであるだろうか。

「もう充分苦しんでいるのではないでしょうか。少なくとも罪の分だけは」

「罪は永遠に消えるものではない」

ピツアロは冷厳にそう返した。

「人間の犯した罪は最後の審判まで消えることはないのだ」

「ですが」

「ですがもこうしたもない」

彼はまたロツコの言葉を遮った。

（わしを脅かした罪は重いぞ）

「罪人は必ずや裁かれなくてはならないからな」

「はあ」

「わかったな。では用意しておけ」

「わかりました」

「私の方も用意をしておく。遅れるなよ」

「はい」

ピツアロは部下達を引き連れその場を後にした。ロツコもその場を去った。だがフィデリオは何故かその場に残っていた。そして彼は言った。

第一幕その五

「悪辣な者、何処へ行くつもりか」

立ち去ったピツアロを見据えていた。

「荒々しく猛りながら何処へ行くか。御前の心には怒りと憎しみしかないというのか」

だが当のピツアロはいない。彼はそれでも言った。

「しかし私の心は違う。暗雲の前の明るい虹が照らしている。それが私を勇気付けてくれる。あの人を助ける為に」

そして決意した。ピツアロのそれとは全く違う決意であつた。

「来たれ、希望よ。苦しむ者の最後の星となれ、それが私を導いてくれる」

言葉を続ける。

「私は希望に従う。そしてあの人を救う。希望がある限り私は諦めはしない。そして必ずや目的を果たす」

「おい、フィデリオ」

語り終えたところでロツコが戻ってきて彼に声をかけてきた。

「何か」

「御前さんも来てくれないか」

「墓掘りにですか？」

「ああ」

それを聞いた時心の中で会心の笑みを浮かべた。

「宜しいのですか？」

「ああ」

彼はそれを認めた。

「有り難うございます。ところで一つお願いがあるのですが」

「何だ？」

「囚人達のことです」

彼は言った。

「彼等にお慈悲を与えてあげてはどうでしょうか」

「？美味しい食事か？」

「そうですね。日の光を」

「獄長の許可なしでか？」

「事後承諾ということで宜しいでしょうか」

「よいことだがお許しになられるかな」

ロッコは首を傾げた。

「責任は私が取りますから。ですからお願いします」

「そこまで言うのなら。では頼むぞ」

「はい」

「わしは獄長にお願いしてくる。ではな」

ロッコはピツアロのところに向かった。こうして囚人達は狭く、暗い監獄から日の光が照らす緑の庭に出ることができた。彼等はあの眩しい光を見上げて喜びの声をあげた。

「本当に久し振りだ、日の光を見られるなんて」

「ああ、全くだ」

彼等は口々に言う。

「新鮮な空気に緑の世界。前に見たのは何時だったか」

「もうそんなことすら覚えてはいない。それだけ昔だったな」

「監獄は墓場だ。だがここは違う」

「自由だ。そして命がある。それに触れられることの何という幸せよ」

身体全体で喜びを噛み締めていた。フィデリオはそんな彼等を見守りながら何かを探していた。

（いないのか、ここには）

何を探しているのだろうか。はたまた誰かか。彼はそれを囚人達の中から必死に探そうとしていた。しかしそれは中々見つからないようであった。

「おい、フィデリオ」

そんな彼にロッコが声をかけてきた。

「来られたのですか」

「うむ。上手くいったよ。獄長は快諾して下さった。いいことだと仰ってな」

「それは何よりです」

彼は笑顔を作ってそれに応えた。

「そして御前さんにもいい知らせだよ」

「何でしょうか」

「今日からずっとわしの仕事を手伝ってくれ。牢獄にも入っていい」
「本当ですか!？」

それを聞いて喜びの声をあげた。

「うむ。その奥にいる男だな」

「はい」

話を聞くその顔が真剣なものになった。

「与えられる食事は次第に減らされている」

「そうなのですか」

「そしてな、殺されることになった」

「何と!」

さっきピツアロが話していたことだ。彼はそれを聞いて愕然とした。

「後一時間程もすればな。こっそりと殺されるのだ」

「死刑は朝の筈ですが」

この時代の欧州においても死刑は朝早く行われるのが普通であった。そういうしきたりとも言おうか。ちなみにこの時代人の血は滋養の効果があると言われていた。その為フランスの貴族達は朝まで遊んだ後で処刑場に向かったりもしていた。そこで死刑囚の血を飲んでいたのである。着飾った、目の下にクマを作った紳士淑女達が先を争って美味そうに人の血を飲む姿はさながら吸血鬼のようだったという。

「予定は変わるものだ。急に変わったのだ」

「どうしてですか?」

「所長の御考えだ」

「そうですか」

それを聞いてやはり、と思った。

「だからですか」

（ではやはりピツアロ自身が）

彼は話をしながらそう考えていた。

（私は自分の愛する人の墓を掘らなければならないのか？何という恐ろしいことだ。それだけはさせない）

「だからあの男に食べ物をやるのは許されないのだ」

「わかりました」

「ではすぐに来てくれるな。そろそろ行くか」

「はい」

「墓掘りにはコツがあつてな」

彼はそう言った。

第一幕その六

「壊れた水溜りの後に掘るのが一番いいのだ。それは知っているか」
「いえ」

「そこまでは知らなかった。墓掘りなぞやったこともなかった。
「はじめてですから」

「まあそうだろうな。嫌な仕事だが我慢してくれ」

「はい」

「何なら一人で行くが」

「いえ、行かせて下さい」

だが彼はそれを引き受けることにした。

「是非共」

「よいのか」

「承知のうえです。だからこそ側において頂きたいと申し上げたのです」

「わかった、では行こうか」

「ええ」

二人は行こうとする。しかしそこにヤキーノとマルツェリーナが血相を変えてやって来た。二人共かなり焦っていた。

「どうしたんだ、二人共。そんな顔をして」

「お父さん、大変よ！」

「所長が！看守長をお探しです！」

「わしをか？」

「何があつたのでしょうか？」

「しまったな」

彼は何かに気付いたらしく困った顔をした。

「所長に囚人のことを申し上げるのを忘れていたわ」

「獄長の許可は得たのでしょうか？それなら大丈夫では」

「実はそこから上があつてな」

彼は言った。

「実際は所長の許可が必要なのだ」

「そうだったのですか」

「まずいな、これは」

「早く囚人達を中に入れましょう」

「さもないと大変なことになるわ」

「いえ、もう少しいいのではないでしょうか」

だがフィデリオは囚人達を庇った。

「久し振りのことですし。責任は私が持ちますから」

「しかしな」

「そんなことを話している暇じゃないわ」

「早く何とかしないと」

そうこう話しているうちにピツアロがやって来た。あの黒服の男達を引き連れている。厳しい顔を更に厳しくさせている。

「看守長、これはどういうことだ!？」

「所長」

ロツコは彼に身体を向けた。

「私はこのようなことを許可した覚えはないが。説明してもらおうか」

「囚人達に恩恵をと思ひまして」

「何故だ？」

「今日は王様の命名日だからでございます」

「そうだったか？」

「はい」

後ろに控える部下の一人がそれに答えた。

「確かそうだったと記憶しております」

「そうだったのか。忘れていた」

ロツコはそれを聞いて胸を撫で下ろした。実は咄嗟に言った言い逃れだったのである。そうした意味でも彼は運がよかった。

「ですから彼等を出したのです。この者達は構いませんよね」

「そうだな」

見ればあの男はいない。それでピツアロは少し機嫌を取り戻した。
「ではいいだろう。この件に関しては不問に処す」

「有り難うございます」

「だがすぐに仕事にかかれ。あの男のことは覚えているな」

「はい」

「ならばよい。ではすぐに取り掛かれ」

「所長」

ピツアロにマルツエリーナとヤキーノが言った。

「何だ？」

「囚人達はどうなるのでしょうか」

「私の許可なく外に出すことはできん。すぐに中に戻せ」

「わかりました。それでは」

ヤキーノが合図をする。すると鐘が鳴り囚人達はそれを聞くとうなだれて牢獄の中へと入って行った。皆非常に悲しそうな顔をしていた。

「折角外に出られたのに」

「これが牢獄なんだ」

囚人達を見て悲しそうな顔をするマルツエリーナに対してヤキーノがそう声をかけた。

「それはわかってるだろう？」

「けれど」

それでも彼女は不満そうであつた。それは彼女の心根故であつた。

「それでは短い間だったか」

フィデリオが囚人達の誘導をはじめた。

「早く戻れ。いいな」

「わかりました」

囚人達は力なく牢獄の中へと戻って行った。皆項垂れ、沈んだ顔で中に入って行った。

ロツコはピツアロに従い牢獄の奥深くへと向かった。そしてフィ

デリオにも声をかける。

「早く来い」

「わかりました」

彼女はそれに頷き彼の後について行く。その途中意を決して呟いた。

「待っていてね、貴女」

一瞬だが女のような顔になった。

「必ず救い出してみせる」

そして牢獄の奥深くへと入って行った。まるでそこにいある何かを取り出そうというように。

第二幕その一

第二幕 勇氣の天使

牢獄の中は暗く沈んでいる。所々が朽ち果て、水で湿っている。そこはまるで洞窟のようであり蝙蝠がいても不思議ではなかった。だがそうした者達はいなかった。

かわりに罪を犯した者達がいる。彼等はその罪を償う為にここにいる。狭く、沈んだ世界でその目だけを光らせている。暗闇の中でその目だけが光っていた。

そのさらに奥に彼はいた。ボロボロになった囚人の服を身に纏っている。その手足には長い鎖があり、それが身動きを制限していた。牢獄の奥深くで彼は捉われの身となっていたのだ。

その顔は決して卑しくはない。汚れてはいるが見事な金髪に彫刻の様に整った品のある顔、青い目をしている。だがその青い目には力はなく肌も土気色だった。長身の長い牢獄での生活のせいかな縮んでいるように見えた。彼は俯き、落胆した顔でそこにいた。

「ここにいてもうどれだけ経つか。静寂と荒廃だけがここにある」
牢獄にいる筈の鼠や虫達さえそこにはいなかった。それはまるで地獄のようであった。

「神によりこの苦しみを受けた。人生の春はすぐに去っていき今はこうしてここにいる。私は真実と正義を口にした為にここに閉じ込められた。これは神の御意志であろうか」

それは誰にもわかりはしない。神という存在が善であるかも悪であるかも本当のところは誰にもわからないのだ。彼にとって善であっても他の者や神にとっては違うかも知れない。人の世とは理不尽なものなのであるから。

「だがそれならいい。私は己の運命を受け入れよう」
彼はそれでもよしとした。

「私は正しいことをした。それはレオノーレがわかってくれればそ

れでいい。彼女が私を理解してくれているのならそれだけで私は幸せだ」

彼の想う人なのであろうか。レオノーレの名を呼ぶと恍惚となった。だがそこには何も無い。静寂と暗黒だけが支配している。そんな中で彼はただ頂垂れ、座り込んでいた。そうするしかなかった。

「レオノーレ」

またその名を呼んだ。

「この地獄に光を呼び込んでくれ。御前だけが私の希望、私の全てなのだ。そうしてくれれば私はもう他には何もいらぬ。喜んでここで死のう」

既に死を覚悟していた。もう諦めていた。彼はただそこで目に見えぬものを見ていた。希望だけを。

その奥に足音が向かっていた。それは二組あった。

「気をつけるよ」

「はい」

それは初老の男と若い男のようなものの二つの声であった。

「ここは滑るからな」

「わかりました。しかし凄く寒いですね」

「地下の奥深くだ。それにここには他に誰もいないからな」

「そうなのですか」

「あの囚人以外は。鼠さえいやしない」

初老の男の声はそう語っていた。冷えきった暗闇の中に声だけが聞こえてくる。灯りが奥の方に向かう。するとそこに二つの影が映っていた。一人はその手につるはしを二つ持っていた。もう一人はスコップを二つ持っていた。

「そろそろだぞ」

「はい」

頑丈な鉄格子が見えてきた。そしてその奥に彼がいた。うずくまっていた。

「あれだ」

「死んでいるのですか？」

フィデリオはその囚人がうずくまり、動かないのを見てそう言った。だがロツコはそれには首を横に振った。

「いや、生きている」

「生きていますか」

「おそらく眠っているだけだ。死んではいない」

「そうですか」

彼はそれを聞いて安堵したような言葉を出した。そして囚人を見た。

「遂にここまで」

「時間がない。すぐにはじめるぞ」

ロツコはそう言つて彼につるはしを一本手渡した。

「そこがいい。じゃやるか」

水溜りを指し示した。だがフィデリオはその言葉をよそに囚人の方を見ていた。

「おい」

「あ、はい」

声をかけられ我に返った。

「どうしたんだ、あまり時間はないのだぞ」

「すいません、誰なのか気になりました」

「あの囚人が誰なのかはわし等には関係ないことだ。気持ちにはわかるがな」

「はい」

（だが私にとつては違う）

心の中でそう呟いたがそれは口には出さなかった。

「もう少して所長が来られる。それまでに掘っておかなくてはならないからな」

「かなりの深さですよね」

「まあな。人を埋めるのだからな」

ロツコはそれに答えた。

「かなり掘るぞ。急がなくてはならん」

「わかりました。それでは」

「うむ」

少し掘ると石が出て来た。

「これをどけてな」

「ええ」

石をどけた。

「さて、また掘るぞ」

「わかりました」

二人はつるはしで掘り続けた。ある程度掘ったところでロツコは言った。

第二幕その二

「これからはスコップを使うぞ」

「はい」

「まだ時間はかかりそうだがな。それでも所長が来られるのはもうすぐだ」

「えらく急いでおられるんですね。何故でしょう」

「さてな」

彼はそれに答えながら腰にある水筒を取り出した。そしてその中にある酒を飲んだ。ブランデーである。

身体があったまった。それを実感しながら彼はフィデリオに対して言った。

「どうやら所長にとっては重要な者らしいが」

「所長にとつて」

「ああ。詳しい理由はわからんがな。何でも政治犯らしい」

「そうですか」

彼はそれを聞きながら囚人を見た。まだ眠っているのかうなだれて座り込んだままである。それを見ながら考えていた。

（似ている）

知っている者に似ていると気付いた。

（本当にあの人の人なのかも。だとしたら）

「お、起きたな」

ロツコは彼が動いたのを見てそう言った。

「おい、生きているか？」

「？私は今音を聞いているのか」

「ああ。どうだ、久し振りにここに来たんだが」

ロツコは彼に声をかけた。フィデリオはその時囚人の声を聞いた。

（この声は）

「生きてるか？話しているところを見ると生きてるようだ」

「何とかな。だがもう死んでいるのも同じだ」

（間違いない）

フィデリオはそれを聞いて確信した。

（あの人だ）

「ここにいる間に何もかもを忘れてしまったようだ。ここは何処だったかな」

「セヴィーリアだよ」

ロツコはそう答えた。

「そうか。その牢獄か。所長は？ 確かドン・ケツアルだったと思うが」

「代わったよ。今はドン・ピツアロ様だ」

「ピツアロ」

囚人はそれを聞いて声をあげた。

「ドン・ピツアロか。警察にいた」

「ああ。それがどうしたんだい？」

「貴方に伝えて欲しいことがあるのだ。お願いできるか」

「わしにできることなら。何だい？」

「レオノーレ・フロレスタンという者がセヴィーリアにいる」

（その名は！）

フィデリオはその名を聞いて興奮した。だが囚人とロツコはそれには気付かない。

「彼女に伝えて欲しいのだ。私はここに無実の罪で捕われていると頼めるだろうか」

「無実かどうかまではわからないがわかったよ」

「済まない」

彼はそれを聞いて礼を述べた。

「そこにいる若い人にも」

「はい」

彼は顔を隠すようにしてそれに頷いた。

「お願いしたのだが」

「わかりました。必ずや」

（今受け取ったわ）

心の中でも頷いたのであった。ロツコがまた言った。

「申し訳ありませんが私達ができるのはこれだけです」

そう言つてパンを差し出した。

「少ないですがどうぞ」

「有り難う」

彼はそれを受け取った。そしてゆっくりと食べはじめた。

「美味しいですか？」

「ええ」

「それは何よりです」

ロツコはそれを聞いて笑顔になった。だがそれは一瞬のことであつた。

「用意はできたか」

ピツアロがそこに姿を現わした。黒い服の上にマントを羽織つていた。

「所長」

「御前達の役目は終わった。去るがいい」

「わかりました。それでは」

ロツコはそれに従いその場を後にした。フィデリオも連れていた。

「行くぞ」

「はい」

彼もそれについて行った。こうしてその場はピツアロと囚人だけになった。

「久し振りだな、フロレスタン」

「その声は。そして私の名を知っているとはまさか」

「そう、そのまさかだ」

ピツアロはニヤリと笑つてそれに答えた。

「御前に一度失脚させられたピツアロだ。だが今復讐の為にここにいるのだ」

「私は貴様の悪行を告発しただけだ」

彼はそう反論した。よろめきながらも立ち上がる。

「罪もない人々を陥れ、その財産を巻き上げるなぞもって他だ」

「他人のものを掠め取って何が悪い」

彼はそううそぶいた。

「奪われる方が悪いのだ。それが摂理だ」

「それは悪魔の摂理だ」

フロレスタンはまた反論した。

第二幕その三

「貴様の言っていることは詭弁に過ぎん」

「何とてとも言え。だが私は貴様のやったことを忘れはしていない」
「そう言いながら懷から小刀を取り出した。」

「死ぬ。せめてもの情けだ。苦しまずに一思いにやってやる」

「くつ、神よ」

「祈れ」

ピツァロは冷たく言い放った。

「そして死ぬ」

「そうはさせない！」

だが突如として二人の間に誰かが入って来た。

「この人を殺させはしない！」

「貴様は」

見ればフィデリオであった。彼は毅然としてフロレスタンの前に立っていた。まるで彼を守るように。

「先程の看守ではないか。どうしてここに」

「悪人よ」

彼はそれに答えるようにしてピツァロを見据えた。

「この人だけはやらせはしない」

「何を言っているのだ、御前は」

彼はそれを聞いて首を少し傾げさせた。

「この男と御前がどういう関係があるのだ。訳のわからないことをするな」

「そうじゃ」

そこにロツコもやって来た。

「突然後ろへ駆けていったかと思ったら。一体どういつつもりだ」

「私はこれから罪人を罰するのだ」

ピツァロはフィデリオに対してまた言った。

「だから退け。邪魔をするな」

「どうしてもこの人を殺すというのか」

「そうだ」

彼は答えた。

「ならばわかった。この人を殺す前に」

ピツアロを見据えて言う。

「先にその妻を殺せ！」

「何っ！」

それを聞いてピツアロもロツコも驚きの声をあげた。

「今何と」

「彼より先にその妻を殺せと言ったのだ！聞こえなかったのか！」

「馬鹿な、それでは君は」

フロレスタンもそれを聞いて驚きの声をあげた。

「ええ」

「レオノーラ？馬鹿な、そんな筈が」

「あなた、顔を見て」

彼女は優しい声で夫に対してそう声をかけた。

「あなたの愛する妻がここにいるから」

「・・・・・・・・・・」

言われるままに顔を見た。見れば確かに見慣れた、懐かしい顔がそこにあった。

「レオノーラ、間違いない」

「ええ」

「君が・・・・・・・・まさかここに来るなんて」

「あなたを救い出す為に。男に変装してここに潜り込んだのよ」

「そうだったのか。そして遂にここまで」

「そうよ。どれだけ苦労したか。けれどそれがようやく報われたわ」

「大胆なものだ。まさか夫を助ける為にここまでやって来るとはな」話を聞いていたピツアロはその厳しい顔に歪みまで入れてそう呟いた。

「だが所詮は同じこと。どのみち御前の夫は助かりはしない」

「私が助ける！」

フィデリオ、いやレオノーラはそう宣言した。

「この命にかえても！」

「死を恐れはしないということか」

「そうだ！」

彼女は言い切った。

「愛する人を助ける為ならこの命惜しくはない！」

「言ったな」

それを聞いたピツアロの身体がワナワナと震えた。

「ならば死ね。二人共な」

小刀を振り上げる。しかしレオノーラも負けてはいなかった。

「死ぬのは御前だ！」

「ぬっ！」

ピストルを取り出してきた。それでピツアロの動きを止めた。

「これでも動けるといのか！」

「ぬうう、小癪な真似を！」

「少しでも動いたら撃つ！その時こそ御前の最後だ！」

本気だった。それがわかるからこそピツアロは動きを止めた。歯
噛みするしかなかった。

「さあ、どうする！？」

「ぬうう………」

ギリギリと下がりはじめた。それが何よりの証拠であつた。彼は
敗れようとしていた。

「道を開ける、邪悪な者よ」

「……………」

「開けなければ御前に死を与える」

「させるものか」

「では死ぬつもりか」

「おのれ……………」

暫く睨み合いが続いた。だがそれは上の方からラツパの音が聞こえてきた。

「これは」

まずロツコが顔を見上げた。

「大臣が来られたというのか」

「おのれ」

ピツアロはそのラツパの音と大臣という言葉聞いて呪詛の声を漏らした。

「もう少しというところで」

「悪は正義の前に崩れ去る宿命」

レオノーラは彼に対してそう言った。

「これが御前の宿命だったのだ。諦めるがいい」

「まだ言うか、この女は」

最後のチャンスに思った。小刀を振り下ろそうとする。しかしそれはレオノーラの持っている拳銃により動けはしない。それが一層腹立たしかった。そうこうしている間に上の方から足音が聞こえてきた。

「むっ」

それは一つではなかった。複数あった。ヤキーノと兵士達が松明を持ってこちらにやって来ていたのであった。

第二幕その四

「ヤキーノ、どうしたんだ？」

「大臣が来られました」

彼はロツコにそう答えた。ピツアロはそれを聞いてさらに不機嫌になった。

「おのれ」

「所長」

ロツコはそんな彼に声をかけた。

「行きましよう、すぐに行かれないと」

「わかった」

彼はそれに頷いた。忌々しげにフロレスタンとレオノーレを見やる。彼は二人を見て舌打ちした。しかしどうにもならないのは彼自身がよくわかっていた。

二人から目を離してその場を去る。それで終わりであった。ロツコもヤキーノも去っていた。そこにいるのは二人だけとなっていた。

「助かったのか」

「ええ」

レオノーラは夫に対してそう答えた。

「私の為に」

「当然のこと」

彼女は言った。

「貴方を救い出す為なら何でもするわ。だから」

「命をかけてもか」

「勿論よ」

「刃の前に身を晒して」

「刃なぞ怖れはしないわ」

そう言い切った。

「その程度の苦難、苦難ではないわ」

「では何を苦難と言うのだ」

「貴方がいないことを」

彼女はそう言い切った。

「それ以上の苦難はこの世には存在しないわ」

「では私にとってもそれは同じだ」

「どういうこと？」

「御前がないこと。それ以上の苦難は存在しない」

「けれどその苦難は今終わったわ」

「ああ」

フロレスタンは頷いた。

「今再び貴方を胸の中に」

「それは私の言葉だ」

彼はそう言うとき妻を自分の中にかき抱いた。

「愛しい妻よ、御前に助けられた」

「それは私の願い」

「これは本当のことなのか」

「そう、本当のことよ」

「私は御前に救い出された」

「私は貴方を救い出した。これこそこの世の最大の喜び」

二人は互いに導きあうようにしてその場を後にする。上へ向かった。そこには光が待っていた。まるで二人を誘うようにして輝いていた。

外では大臣が到着していた。ファンファールに迎えられ中に入る。見事な礼服に身を包んでおり、金色の髪を綺麗にまとめている。黒い目が強い光を放っている。がっしりとした身体がそのままの足取りで先に進む。彼がスペインの司法大臣フェルナンドである。

「ここの所長はいるかね」

「はい、こちらに」

黒服の男がそれに応え指し示す。ピツァロが恭しく出て来た。「ようこそ、このような所にまで。御苦勞をおかけします」

「うむ」

今までの傲慢さは何処へ行つたのか。極めて卑屈な態度であつた。
「今日ここに來たのは他でもない」

「はい」

ピツアロはそれを聞いて身を引き締めさせた。

「陛下直々の御声掛かりだ。哀れな囚人達に神の恩恵を与えるべきだとな」

「陛下の」

それを聞いただけで顔が青くなった。

「だからこそ私はここに來たのだ。罪の軽い者やはつきりしない者は解き放たれなければならない」

「恩赦ですか」

「そう、暴君の厳格な裁きは陛下の欲されるところではない。無論私も」

「わかりました」

それを聞くだけでまた顔が青くなる。

「陛下が受けられた神の恩恵を伝える為に私は來たのだということ
をわかつてくれ」

「はい」

「それでだ」

話そうとするとそこにロツコがやって來た。

「フェルナンド閣下ですか」

「そうだが。そなたは」

「あ、待て」

ピツアロは彼を呼び止めようとする。

「ここの看守長です。卑しい者ですので御氣に召されずに」
「いや、いい」

フェルナンドはピツアロの言葉を退けた。

「話したいことがあるようだな。まずは名乗ってくれ」

「わかりました。私はここの看守長のロツコと申します」

「うむ」

「閣下に御会いして頂きたい者がいるのですが」

「誰だ？」

「何でもありません」

ピツア口は必死にそれを妨害しようとする。だがそれは適わなかった。

「待て、私はこの者の話を聞いているのだ。そなたの話ではない」
「しかし」

「そなたの話は後で聞く。今は黙っているがよい」
「クツ……」

彼にとって全ては終わった。だが観念したわけではなかった。

第二幕その五

「それは誰だ？」

「この二人です」

そう言つて後ろからフロレスタンとレオノーラを招き入れた。レオノーラはフロレスタンを支え、フロレスタンはレオノーラに支えられながらフェルナンドの前にやつて来た。

「まさか……」

フェルナンドはフロレスタンの姿を見て驚きの声をあげた。二人は古くからの友人であつたのだ。親友といつてもよい。

「フロレスタンか！」

「フェルナンドか」

二人は互いの顔を見てそう言い合つた。

「まさかこんなところで」

「久しぶりだな、元気そうで何よりだ」

「どうしてこんな所に」

「君も大体想像がつくと思うが」

「……そうか」

彼にもわかつた。何故友がこんな場所にいるのかを。理解すると共に怒りがこみ上げてきた。

「閣下」

ピツアロが最後のあがきを見せた。

「お話を」

「黙っておれ！」

フェルナンドは彼を一喝した。それで黙らせた。

「今私は友と話をしている。貴様になぞではない！」

「……」

それで黙ってしまった。以後観念したのか頂垂れているだけであつた。フェルナンドはその間に友と話を続けた。

「無事で何よりだ。噂では死んだとさえ聞いていたが」

「実際に命を落すところだった」

「……そうだったのか」

「悪魔に命を奪われるところだった。だが天使に命を救われた」

「その天使とは？」

「彼女だ」

そう言って自分の妻を指し示した。

「我が妻レオノーレだ」

「貴女が私の古くからの友を救い出してくれたのですか」

「はい」

レオノーラは笑みを浮かべてそれに答えた。

「それが願いでしたから。長い間捜し求めていまして」

「そしてどうやってここに」

「男に化け看守となっていたのです」

それはロツコが言った。

「では貴女がフィデリオ」

「ええ」

彼女はマルツェリーナの言葉に頷いた。

「御免なさいね、今まで隠していて」

「いえ、そんな」

マルツェリーナは驚きのあまりどう言ったらいいのかわかつては
いなかった。

「まさかこんなことが」

「驚くのも無理はないさ」

ロツコは娘に対してそう言った。

「お父さん」

「何を隠そうわしだって驚いているのだからな。全く見事に騙して
くれたものだ」

「しかしそれにより我が友は救われた」

フェルナンドはそれを聞きながらそう述べた。

「見事なことだ」

「閣下」

そこに将校が一人やって来た。彼が連れて来た者である。

「何だ」

「ドン＝ピツアロはどうでしょうか」

「取調べを行え。事情がわかり次第処罰する」

「ハッ」

それを受けてピツアロは連れられていった。頂垂れた彼は左右を兵士達に押さえられてその場を後にした。こうして悪は滅んだのであった。

「復讐の刃は正義のより阻まれる。そして正当な裁きが法廷において下される」

「万歳！万歳！」

囚人達も看守達もそれを聞いて万歳を叫ぶ。彼を讃えているのだ。だが彼は自分が讃えられるのをよしとはしなかった。

「いや、待て」

「何故でしょうか」

「私は讃えられるべきではない。讃えられるのはそなた達に愛を下された陛下と神に対してだ」

「神に」

「そうだ。皆陛下と神を讃えよ」

「はっ」

「そしてこの高貴なる女性を」

次にサオノーラを指し示した。

「身の危険を顧みず夫を救い出した彼女を。皆で讃えるのだ」

「フェルナンド」

「フロレスタン、私は君が羨ましい。天使に加護されているのだから」

「そんな」

「皆天使を讃えよ！」

「はい！」

皆それに頷いた。

「神は常に我等と共におられる！そして天使も！」

「レオノーラ」

フロレスタンはその声の中妻に目をやった。

「あなた」

「今この声が聞こえるな」

「はい」

「皆が君を祝福してくれている。君を讃えているのだ」

「そう、貴女を」

フェルナンドも言った。

「愛が貴女を導かれたのでしょう。真の愛は恐れを知らない」

「はい」

レオノーレはそれに頷いた。

「私は恐れませんでした。愛の為に」

「そして私を救ってくれた」

「これを天使と言わずして何と言おうか。このような妻を持つ我が友に祝福あれ！」

「フロレスタンに祝福あれ！」

皆それに続いて叫んだ。

「夫の命を救った妻を讃えよ！そして彼女をもたらした神を讃えよ！」

「神よ、感謝します！」

「この様な天使を彼に与えた恩恵を、そして正義の力を！」

「あなたはまた私のものとなったのね」

「そう、永遠に君のものだ」

フロレスタンとレオノーラは互いに抱き合った。

「もう離さないわ、永遠に！」

「最後の裁きのその日まで！」

「万歳！万歳！」

暗い刑務所に歓喜の聲が木霊した。その聲は何時までもそこに鳴り響いていた。

フィデリオ 完

2005・8・13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3592f/>

フィデリオ

2011年4月28日00時40分発行